

平成27年度「いわて教育の日」のつどい 講演録（要約）

○日時：平成27年11月26日（木）13:00～16:25

○会場：岩手県民会館 大ホール

演 題 未来に生きる子どもたちのために
～これからの岩手の教育に期待すること～

講 師 安西 祐一郎 氏（独立行政法人日本学術振興会理事長）

はじめに

皆さん、こんにちは。本日は、10周年を迎えられた平成27年度「いわて教育の日」のつどいにお招きいただきまして誠にありがとうございます。

「未来に生きる子どもたちのために」という題の意味は、今に生きる大人たちのために教育があるのではないだろうということです。高校生の皆さんもたくさんいらしてありますが、未来に生きる子どもたちのために大人が何ができるのか、また高校生を含めた皆さんが何ができるのか、こういうことをお話ししたいと思いやって参りました。

被災された方々には心からお見舞いを申し上げます。

あの3月11日の1カ月余り後、岩手県と宮城県の県境にプライベートで行く機会がありました。北上川の春も深く、新緑の候で、非常に大きな被災を受けた北上川のほとりの小学校でしたが、大変多くの子どもたちが亡くなった、その場所に立ちまわって、一体自分は何ができるのかということを改めて考えました。皆様のほうがいろいろご苦労は多いかと思いますが、その風景、光景は、今でも鮮やかに目に残っていて、そのことが自分をひとつ支えていると心から思っています。

高校生の皆さんが社会の第一線で生き生きと活躍をしていくのは今から恐らく10年、20年、30年の後だと思います。例えば30年後、2045年から2050年です。高校生の皆さんが50歳に近い、そういう時代になったとき、日本は、岩手県はどうなっているのだろうか、また世界はどうなっているのだろうか、これに思いをはせることで初めてこれからの教育はどうあるべきかということが考えられるのではないのでしょうか。

学校の先生方、また教育委員会の方々等もいらっしゃると思いますが、教育の場というのは、明日、明後日のことがあって本当に多忙だというのは私もよく知っていますので、そんなこと言われたって明日から何をしろと言うのだ、今やっていることをきちんと続けていく、子どもたちを育てていくことが教育現場の役割ではないかというように言われるかもしれません。それをあえてこの壇の上から申し上げますのは、20年、30年後、あるいはもっと先の未来に生きる子どもたち一人一人がこれからの人生を幸せに生きていくことができるようにしていくにはどうしたらいいかということ、学校現場、あるいは保護者の皆様、岩手県の方々に、多

少考えていただければありがたいということです。

岩手県で学ぶ子どもたちのために

岩手県内で暮らすにしても、この盛岡市で暮らしていくにしても、これからの時代は世界と向き合っていかなざるを得なくなると思います。経済の問題もそうだし、政治の問題もそうです。世界のいろいろなところで、毎日本当に大変なことが起きています。世界と岩手県のつながりは、岩手県が日本の中であって、日本の中でも東北地方にあってというように段階を踏んだものではなくて、世界と直接つながっていくことになるだろう。これは、何か英語を勉強しなければとか、国際性を持たなければなどというよりは、むしろ感覚的なものです。世界中が近くなっていく、それをグローバル化と呼んでいるのだと思いますが、そういう時代になっていくだろうと思います。

1993年の日本の18歳人口は大体200万人ぐらいでした。今は120万人ぐらいになっています。2018年以降は日本の人口全体がさらに減っていくことが予測されていて、2030年になると100万人を切るだろうと。これは何か大変だ、大変だと人は言うことが多いのですが、一方で活躍できる場が広がっていくというように考えるべきだとも思います。

では1993年ぐらいから今2015年にかけて何が変わったのだろう。1つは18歳の人口が減りました。その減った分というのは何が減ったのだろう。大学への入学者数はそれほど減っていません。何が減ったかという、高校を卒業して就職する人の数なのです。このことは何を言っているのかというと、大学に進学する人たちが、ただ大学に行けばそれでいいという時代ではなくなったということです。大学に行ったからといって、自分でその先暮らしていくための力を身につけない限り、大学に行けば何とかなった時代とは違って来たということです。高校を出て仕事に就こうと、あるいは大学を出て仕事に就こうと、どちらにしても、これからは自分の力を発揮して人に貢献するにはどういう力を自分は持っているのだろうか、それを学校にいる間に一つ一つ確認していくことが大事なのではないかとということです。

先ほどご紹介いただいた司会の高校生の方、すばらしいですね。目をつぶっていると本当にプロフェッショナルな、落ちついたしゃべり方でびっくりしました。宣言された中学生、あるいは郷土芸能をやった児童の皆さんもそうです。そういう子どもたち、若い人たちが育ってきているということを大人は受けとめていかなければいけないと思うのです。

では、今の教育をどうしていったらいいのだろう。

ただ1人で先生が1人でしゃべって、それを「はい、はい」と聞いて黒板をノートにとるといふ、いわゆる一斉授業の形態が、アクティブ・ラーニングという授業の形態へと少しずつ変わりつつある。子どもたちが一人一人、アクティブに自分から授業に参加していくという授業のスタイルがだんだん出てきています。これが先ほどから申し上げている、将来大人になったときに社会で仕事をしていく、それが世界とかかわっていく、そういう中で活躍の場も自分で見つけながら自分の人生をつくっていく、その素地になっていくわけです。

未来に生きる子どもたちのために

未来に生きる子どもたちのために5つ申し上げます。1つは「主体的に生きる」。それから「多様な人々と生きる」。多様な人々というのは、仲間ということではなく、初めて会った人だと思っていただいてもいい。初めて会った人たちと信頼関係を結びながら、チームでいろんな仕事をしていく、学んでいくということがこれからとても大事になっていくだろう。それには恐らくクラスや学年、学校を超えたコミュニケーションが大事になっていくのではないかと考えています。

それから「協力して生きる」、「感謝して生きる」、「誇りにして生きる」。「誇りにして生きる」ということを少し前もって申し上げますが、どうも自分はどうしたらいいのだろう、自信をなくしてしまう、そういうお子さんが多いように見受けられる。いじめのことを開会のときにおっしゃっていましたが、命というのは本当にかげがえのないものなので、それを失ったらおしまいです。そして、命というのは人に支えられている。一方で、自分も人を支えているということです。自分の命が人の命を支えているのだと、人を支えているのだということは時々思い出したほうがいいのではないかと。それは、自慢して言う必要は全くありません。心の中で思っているだけでいいのですが、自分が周りの人たちを支えているのだということは内心誇りにしていいことではないかと思うのです。そういう自信、誇りが人の力をつけていく、人の大きさを大きくしていくのだと思います。

主体的に生きる

それでは、「主体的に生きる」とはどういうことなのだろう。主体性というのは、人によって定義が全然違いますが、「主体的に生きる」とは、自分の目標を自分で発見する、またその達成に向けて実践することができる、これが主体性ということの原点にあるだろうと思います。車で言えばエンジンみたいなものです。自分の原動力になる部分です。例えば進路の問題でいえば、将来就職するのか、あるいは大学に行くのか、大学へ行くのだったらどうするのか、就職するのだったらどういふところに就職するのか。周りの方からいろいろ参考となる話を聞くことは、絶対必要なことです。いろいろな情報をとって、先生も含めて尊敬できる人から話を聞くことは本当に大事なことで、早くから信頼できる方を見つけていろいろな話を聞かれるといいと思います。ただ、決めるのは自分だということです。なかなか決められないかもしれないけれども、自分で目標を見つけていく、決めていくということを、小さいことでもいいから少しずつ経験していくことが大事なのではないかと思っています。

学校のペーパーテストには大体答えがあり、答えがあるのだと思って問題を読む。ところが、社会の問題というのは答えはないので、答えを探しに行ってもどこにもないわけです。その答えのない問題に答えを見出す力というのが本当に大事になっている。そういう力を持つためには、人から言われたというのではなくて自分が本当に何をしたいかということが、最後の最後できいてくると思います。

では、目標を見つけるにどうしたらいいのだろう。よく大人は夢を持ちなさいと

言いますが、夢を持つことと目標を見つけることは、ちょっとずれがあります。何となくぼんやり、ああいうふうになりたいというのは夢であって目標ではないわけです。目標というのはもっと具体的なことであって、何にもしないで机を前にしてうんと考えている中ではなく、毎日毎日本当に一生懸命いろんな経験をしている中から目標が見つかってくるということです。だから、ここに目標が発見されると書いてありまして、目標を持ちなさいとは書いていないのです。

多様な人々と生きる、協力して生きる

それから、「多様な人々と生きる」、もう一つ似ていますけれども、「協力して生きる」。1人で生きていくことはもちろんできないわけで、ほかの人たちと一緒に協力しながら生きていくということ、それが生きるということです。人の心を感じることができるかどうかは、いじめのことだけではなくて、社会で仕事をしていくときには全然違った背景を持った人たちが一緒になってチームを組んで仕事をすることが多いので、チームの相手、メンバーの気持ち、心を推しはかることができるということがとても大事な力になっていきます。そういう力は、明日持とうと思っただけでできない。少しずつ、少しずつ身につけていくべきことだと思います。生きていくためには自分が何とかしなければならぬ、人をある意味押しつけても生きていかなければならぬ、それが社会のある側面です。そういう中で協力しながら生きていく、多様な人々と生きていくことができるかどうかということがとても大事になっていくと思います。

感謝して生きる、誇りにして生きる

ほかの人の命があって初めて自分の命がありますし、自分の命があって初めてほかの人の命があるわけで、それはやっぱり「感謝して生きる」ということと「誇りにして生きる」ということにきいてくる。私、大体月1回以上海外に出張しており、世界でいろいろな人たち、若い人たちとも会いますが、日本人の場合は「誇りにして生きる」ということをもう少し強調していいのではないかと思うところがあります。自慢するというのではなくて、自分の内面でいいので誇りにするということが大事だろうと思います。

「生きる」を支えるのは

それでは、生きることを支えるとはどういうことなのか。私は岩手生まれの人たちには特に岩手というふるさとが大事だと思うのです。それはなぜかというと、どこか安心して戻れる場所があるということが、先ほど申し上げたような、生きていくということの一番土壌のところにある。それがないと、なかなか苦勞が多いということでもあります。安心して戻れる場所、それは学校、自分の母校であってほしいと思います。小学校、幼稚園、保育園、あるいは地域でもいいのですが、なかなか安心して戻れる場所がなくなっているということがいじめの一つの課題なのではないかと思っています。

また、生きるというのは楽しいことで、楽しさというのはただ何となく受け身の

楽しさではなくて、やはり挑戦していくということです。挑戦していくということは楽しいことだ。挑戦するためには自分が安心していられる場所というのが大事なことなのではないかと思っています。

抽象論ですけれども、今申し上げた、「主体的に生きる」、「多様な人々と生きる」、「協力して生きる」、「感謝して生きる」、「誇りにして生きる」。この5つを持っていけば、生きていくことはできるのではないかということが、未来に生きる子どもたちのために申し上げたかったことであります。

社会改革としての「教育の転換」

今、日本のこれからの教育がどのように変わっていくべきか。実は、今ずっと私が申し上げているような方向に変えていこうという努力が、文部科学省を始め、全国のいろいろなところで始まっています。いろいろな高等学校で、生徒さんたち一人一人が自分からアクティブに学習にかかわっていきけるような、アクティブ・ラーニングという教育のスタイルを取り入れようとする試みを始めています。

大学というのはなかなか変わりにくいところですが、大学生というのは何となく授業に出て、何となく単位を取って、何となく卒業するというのが昔の大学の普通のことでしたが、ある意味生き残りということもあり、大学の教育自体が、学生が自分から学んでいく、それをどうやったら助けられるかというアクティブ・ラーニングの方向に変わりつつあります。

学力の3要素とよく言われます。学力の3要素とは、1つは基礎的な知識及び技能です。2つ目はこれらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等の能力、3つ目が主体的に学習に取り組む態度です。知識、技能がなかったら、暮らしてはいけません。どれが欠けても困ります。この3つ全体をバランスよく持ってもらいたい。

高大接続システム改革

中学から高等学校への進学率が今、日本全体では約98%に達しています。高等学校の教育をどうしたらいいのかということが日本の教育全体の中で非常に大きな柱になってきています。それに伴って大学の教育をどうしたらいいのかということも課題になっている。教育の転換の政策がいろいろとられ、考えられていますが、課題は十分な知識、技能を持って、それを活用できる思考力、判断力、表現力を臨機応変に発揮できる、主体性を持って多様な人々と協力して学び、働く力が身につく教育の機会、そういう学びの機会を全ての子どもたちが持てるようにするには一体どうしたらいいのだろうか。

そのために、今学習指導要領の抜本的な改訂の議論が行われています。新しい学習指導要領に入れるべきこととして考えられているのは、例えば新しい科目を入れること。1つは歴史総合という科目で、名前は仮称ですが、日本史Aと世界史Aを統合して、日本と世界の近現代史をディスカッションをベースにしてアクティブ・ラーニングのスタイルで学んでいくようにしたい。それから、地理というのは国や首都の名前を覚えることももちろん大事なのですが、それだけではなく社会がどう

いうふうに動いているのかということも含めて地理総合という科目が考えられています。18歳に選挙権がおりる、これを踏まえて公共という科目をつくっていききたいという動きがあります。英語についてはスピーキング、ライティングをもっと入れていきたい。スピーキング、ライティングが、リーディング、ヒアリングと違うのはアクティブで、自分で主体的にかかわらなかつたらできない、ヒアリングは聞こえてくる、それが違うのです。また、情報という科目が一応ありますが、その内容を抜本的に変えていききたいということが考えられています。

高大接続システム改革、高校と大学の接続をどうしたらいいか。大学教育と高校教育を両方アクティブ・ラーニングしていくと同時に大学の入試を変えていきたい。センター入試が今のところ2020年から徐々に新しいものになっていき、センター試験にかわるテストとして、大学入学希望者学力評価テストが、仮称ですけども、考えられている。恐らく3月末に最終報告が出ますが、12月から3月にかけて問題の例、あるいは作問の方針を出していく予定です。

また、恐らく2019年から高等学校基礎学力テストというテストを自分でアプライすれば受けられるようになっていくだろう。いずれにしてもアクティブに高校生が自分から学んでいききたいということをサポートしていくような学習指導要領と、高大接続の改革、これを政策で打ち出していこうということで、今文部科学省が相当白熱した議論をやっています。

まとめ

これから5年、10年、20年かけて日本の教育がこのように大きく変わっていくのだということは、今日いらしている大人の方々は、ぜひご理解いただき、これからの時代を共有していただきたい。これから世界の転換も含めて大きな時代の変化の中で岩手県も生きていくことになります。その中で安心できる場所であっていただきたいのと同時に、こういう時代の変化に伴う教育の転換について、子どもたちが一人一人人生を大きく切り開いていけるように、最初に申し上げたように何十年後の日本、あるいは岩手県がどうなっているだろう、誰もわかりませんが、そういうことを考えながら教育の場をつくっていくということが求められていくのではないかと思います。

イギリスの中学校の世界史の教科書の後ろに中学生が自分で勉強するためのセルフガイドがついています。セルフガイドだけで何十ページとあるのですが、例えば歴史を学ぶのであれば因果関係、原因と結果の関係という見方で歴史を見たらいいよというのが書いてある。ほかにも事例をちゃんと比較しなさいとか、プレゼンテーションの仕方まで書いていて、文章で発表する場合、図で発表する場合、どうしたらいいのかとみんな書いてある。イギリスの教育が全部いいというわけではなく一つの例ですが、日本の教育の中で、アクティブ・ラーニング、主体的に学ぶというのは大事ですが、一方で、学びの型を教育現場でもきちんと押さえて、それをきちんと生徒に学んでもらうということが大事だと思います。

岩手の教育に期待することということを言われているのですが、口で言うのは簡単で、大変なことだと思いますが、ぜひ岩手県が震災を乗り越えて、安心できる場

になっていていただきたい。いつでも帰ってこられる場になっていただきたいと思います。その上で、岩手県から主体性を持って、多様な人々と協力してこれからの時代をつくっていく、そういう若い人たちが出てくることを本当に心から期待しています。

どうもご清聴ありがとうございました。